

IGER Seminar

アルツハイマー病のワクチン療法は どうして不成功に終わったか？

～βアミロイドの血管依存性クリアランスの重要性について～

講師

猪原匡史 博士

公益財団法人先端医療振興財団
先端医療センター再生医療研究部 副部長

脳はそのホメオスターシスを維持するために血液脳関門という関所を発達させた。しかし、嚴重な関所が発達した結果、間質液(細胞間隙液)は容易には血管内腔側に戻ることができなくなり、他の排液路を流れて処理される必要が生じた。脳以外の臓器ではリンパ管がその役割を担うところであるが、脳にはリンパ‘管’が存在しない。しかも、脳では動脈と静脈が並走せず、その灌流システムは他の臓器にはない特殊性を持つ。そこで、脳には「血管周囲リンパ排液路」という間質液の通り道が存在し、血管拍動が駆動力となっている。間質液に含まれるβアミロイドは重合すれば血液脳関門を越えにくく、本排液路に沿って沈着することで脳アミロイド血管症を招く。アルツハイマー病に対する、βアミロイドペプチドを用いたワクチン療法では脳アミロイド血管症がかえって悪化したことから、本排液路を介したβアミロイドの排泄促進がアルツハイマー病治療の一助になると期待されている。本セミナーでは、βアミロイドのクリアランス機構について概説するとともに認知症における血管性因子の重要性について言及し、アルツハイマー病制圧に向けた我々の取り組みについてもお話ししたい。



博士課程教育
リーディング
プログラム
Program for
Leading
Graduate Schools

プラットフォーム システムバイオコース (創薬科学研究科との
ジョイントセミナーです)

- 日時 6月28日(木) 17:00～18:30
- 場所 理学南館1Fセミナー室